

ついのべ抄

#004

たまの休日なんだからと

妻に背中を叩かれるまま掃除機をかけていると、
彼女の唇に人差し指が立った。

ベランダでひらひらと羽を休める

モンシロチョウである。

音もなく訪れた

その休息を邪魔するのも気が引けたので、
しばし春を眺めた。

卒業式を終えて空っぽの教室。

柄にもなくセンチメンタルに駆られた

僕を待ち受けていたのは

黒板一杯に殴り書かれた文字だった。

「立川コキユートス」。

手に付いたチョークの粉を払った彼が僕に笑いかける。

その意味がわかるのは5年後の事なのだが、

やっぱり文字数がオーバーした。

部屋を整理していたら

母が使っていたレインコートが出てきた。

格好がみつともないからと嫌う私と違って、

両手が使えるから便利と言っていた。

周りに誰もいないのを確認して着てみる。

私はこの先も着ないだろうから

母と一緒に送り出せば良かったと、

ひっそり泣いた。

雨が降る。

駅ビルの喫茶店は人が少ない。

普段は満席の窓際に陣取った。

持て余した時間を

さてどうしたものかと考えあぐねて、

ふと駅ビルの出入り口を見下ろす。

雨天の駅ビルから、傘の花が咲いていた。

彼女にとって僕は透明人間になり下がった。
いくら声をかけても振り返ってくれない。

今にもわか雨で騒ぎ出しそうな曇天の下、
早足の彼女を見付けた。

「あ、おい！」

「…ほんとだ」

立ち止まった彼女が見上げたのは、

雲間に見えた青空。

空に助けられた。

僕がまだ

母に背負われていた頃からよく聞いていた言葉を、
今また、隣で言う。

「夕陽が溶けて見えるのは、

疲れてあくびしてるせいなんだよ」

近く産まれるであろう孫にも

きつと同じ言葉を言うのだろう。

温かい背中に背負いながら。

電信柱に風船が引つ掛かっていた。

見れば、他の電信柱にも引つ掛かっている。

果てには車、家、野良猫に至るまで。

一本の木に風船をくくり付ける少女を見付けた。

「きみの風船？」

声をかけると彼女は笑う。

「もうすぐ空に飛べるから、待ってて」

トイレットペーパーを巻き取ると、
何かが書かれていた。

「198x 誕生」

さらに巻き取る。

「199x 小学校入学」

「初恋」

「交通事故」

「友人Cと出会う」

などなど。

紙はまだまだ残っているのだが、

これ以上巻き取る事はおろか

使つて水に流すなんてできるはずもない。

街角から鼻歌が聞こえてきます。

「もしもしかめよかめさんよ

せかいのうちでおまえほど

あゆみのろいものはない

どうしてこんなにねむいのか…Zzzz」

と、その猫は日陰で眠ってしまったのでした。

発車ベルが鳴る。

徐々に速度を上げる列車に
すがり付くように駆け出した。

短距離走の苦手な足はそれでも頑張つて、
ホームの端から列車の後ろ姿を見送る。

よし、ここで手を振ろう。

呼ぶ名前も涙も、今はまだ出さない。

明日のために取っておく。

ついのべ抄

#004

了

Written by nakoso (as inabetz)

© nakoso 2010

<http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>

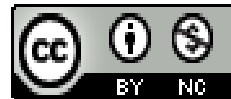
Release Date 2010/9/22

Twitter (as inabetz) :

<http://twitter.com/inabetz>

Mail :

nakosokan@gmail.com



「ついのべ抄 #004」

by nakoso is licensed

under a Creative Commons 表示-非営利 2.1 日本 License.

Based on a work at <http://bottlenovel.blog.shinobi.jp/>